

「ポートランドで何かを感じ、何かに気づくことができるのか、それをどのように日常に当てはめていくのか」が、自分自身にとってのポートランドでの研修テーマであった。

ポートランドの姉妹都市である札幌市と似たような街並みを感じながら、自転車に乗り、37kmの道のりを進みながら市内探索を行った。ここでは市民へのインタビューを行ったが、まず最初に出会ったのがベリアンさんという女性だった。ベリアンさんは、サウスイーストアップリフトという地域のネーバーフッドアソシエーションの活動を支援する仕事に就かれていた。彼女がもともと地域活動に興味を持ったのは、自宅近くの公園管理のボランティアをしたいという個人的な想いがきっかけとなり、その活動を進めるに当たりサポートしてくれたのが、今仕事をしているサウスイーストアップリフトだったそうだ。彼女と話をしているうちに、ミルウォーキー市周辺に住んでいることがわかり、オークグローブのマックス駅開発の事を訪ねると、ケースで学ぶこととなるアーバン・グリーンのチップス氏とも一緒に仕事をしたことがあるという。この偶然には本当に驚いた。(チップス氏は今まで沢山の方と出会い仕事をしているので、彼女のこと明確には覚えていなかったが…)

公園で出会ったインタビューしたご夫婦も、地域の方々に誘われて魚道の整備のボランティアをしていたという。ご主人は、金銭的な支援をし、奥さんはボランティア作業をしていたとのこと。そのきっかけも、自宅周辺の河川の自然を守るというものだった。イブニングサイトビジットで訪れたディペイプという活動を視察に伺った際も、活動のきっかけは自宅の裏が舗装され、雨水の自然の濾過が必要だと感じた方がアスファルトを勝手にはがしたことがきっかけとなっている。

住民が何かしなければと考えるきっかけは、自分の身の回りにある直面する問題に起因している。その小さな気づきと活動の積み重ね、その活動を支援していく行政の体制が、市民活動が活発である根本にあるものだと感じた。また、ポートランド市役所を訪れたときに職員の方がさりげなく言われていたと思うが、ポートランドでは朝、夜と住民のボランティア活動が盛んに行われている。そこには、市としても「このような街にしたいという明確な意思がある」という話をされていた。ただ単に住民の要望を聞き、形にしていくだけではなく、役場職員としても「住民主体」という、忘れてはいけない言葉をしっかりと持ち続けなくてはならないものだと痛感した。昔は住民が自分の住む場所や飲み水、道路など生活の身近な問題について話し合い、1つ1つの問題を互いに手を携えながら解決していき、今の村の姿へと繋がっているのではないかとポートランドを振り返りながら考えている。自分達で考え、自分達で実践していく。行政の一方的な「住民のために」との発想は、足元にある課題から離れているのかもしれない。職員として住民の抱える課題を共有し、その想いを引き出し、一緒になって物事に取り組んでいかなければならない。

アーバン・グリーンの事例やイノベーション・ラボを通じては、地域住民とのコミュニ

ケーションの第一歩、課題に対して利害関係者をしっかりと把握し、彼らを巻き込みながら議論していくということを学ぶことができたと思う。住民と信頼関係を築き、1つの課題、テーマに関して議論を重ね、良いアイデアはその場の議論で膨らんでいき、淘汰されるべきものは淘汰されていく。その場では多数決を用いず、議論の場で参加者の合意を形成していく。そのためには、まず相手の意見を尊重し、決して否定はしないこと。とにかく住民が話しやすい環境を作り出し、様々な知恵と経験を反映させ目的達成に結びつける。住民だけではなく、組織の中においても共通して言えることだと感じている。

日本とポートランドでは行政機構や議会のあり方が全くといっていいほど異なっていたが、メトロ、ポートランドプランの視察を通じて、地域活動を担うリーダーの後継者の問題や行政職員の人事異動による地域住民とのコミュニケーションの問題など、システムは違えど、共通した課題を持っていたことは大変興味深く感じられた。地域のリーダーを育てることや見つけ出すことは簡単な事ではないが、今自分の財産となっているコミュニケーションを大切に、情報や課題を共有していくことによって、自分達が考える何か小さな事からスタートしていきたいと思う。また、その小さな実績を積み上げ、住む人が、自分達が主役であると感じられ、そこにはしっかりと手を携える役場がある。これからは、このように前へ進まなくてはいけないと感じたポートランド研修であった。そこに楽しみを共感しながら。

私個人としても初めての海外への機会を与えていただき、また役場職員として20年を経て、今まで経験したことのない経験を異国の地でさせていただくことができました。これもPSUのスタッフの皆さんが側に寄り添い、サポートしていただいたお陰だと感謝しております。西芝先生をはじめPSUのスタッフの皆さん、東京財団週末学校事務局の皆さん、そして同期の皆さん、大変有り難うございました。最終日の卒業式は、私にとっての大切な宝物です。

